

表紙, 目次, 漫録

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38665

明治三十六年十二月二十五日發行

十全會雜誌

第三十號

(非賣品)

全澤園學專門學校十全會

十全會雜誌第二十號目次

○原著

○眼瞼軟骨ニ於ケル管狀葡萄狀腺

ニ就テ(圖入)

醫學博士 高安 右人

○神奈川縣ベスト病況報告

醫學士 野田 忠廣

○漫錄

○菊日記

野村 彌城

○歌反古

同

○會報

○本會役員○新入生を迎ふ○入學式及び入學生○卒業生諸君を送る○卒業證書授典式○卒業生諸氏送別會概況○高安博士の祝賀會○秋季遠足運動會
 ○實彈射擊演習○醫事新聞社の雜誌寄贈○十全會圖書の貸與○紀念書籍寄贈○石川教授の書籍寄贈○雜誌部記事○講話部記事○弓術部記事○解剖遺體法會○小野實民救助院へ寄附○叙任及辭令○會員動靜○三十五年度決算
 ○三十六年度豫算

○會告

○寄贈及交換書目○會費領收

—*—*—*—*—

曩に學曆の改まると共に霜坪
 部長健腕を弦影に縋みしより
 二三子亦或は去り或は疾む松
 柏の存するありと雖も歳愈々
 寒く日將に暮れなんとす僅に
 雪煩によりて舊路を摸索す彼
 に迂回し此に逡巡す白駒眞に
 矢の如きも老鷲の遅々を如何
 せん敢て後れたるにあらざる
 なり謹て告く

細流子

漫 録

○菊日記

醫一野村雨城

ある日、「うつしとりてよ」と妹の子が、菊の花を送り
けり。おのれ、文机の友になさばやと思ひ、小なる
九谷焼の水がめにさしけるが、あります。がたのやさ
しさに、散りはてん日までの日記をものしてみると、
戯れよ筆をとりぬ。やがてろの日を一日とくり初め
つ。

一日

天はれて心地いとし、愛讀の詩集とりいでこよみもて
ゆく。ふと秋風颯として裏畑の鳴子にひびき、庭園の梧葉
かささ落つ、あゝ我れは一葉散りて天下の秋を知りぬ。
九日ぶりに例の風呂屋に出かけ、休み礼みて戻る途中、
下駄の鼻緒を切りて大に閉口す、糞にふれて終夜眠られ
ず。

二日

試みに繪筆とり出で、年玉にもらひつる書箋紙の、やゝ
しはつきたるを打のべ、水瓶の花うつさんと思ひたつ。
輪割もろこくにたへたれば、いで彩色せんものと書の
具をとさるめぬ。

暫しありて、竹馬の友南水子はわれを訪ひ、野遊びに出
でばやと申す、余も亦風流のヤマ氣出して杖を曳かんと
し、とりあへず、御所柿もてなす、談たまく日露の紛
争にうつり、口角泡を散じて論ず、彼もまた樂しげよ討
ちぬ、入相の鐘に驚き、友は急ぎ去る、書ついに成ら
ず、野遊また果たさず。

三日

東都の客、槩舟子より端書にろへて雜誌「蘆笛」を送り來
る、披き見るところ、韻文欄秀逸の部に余が作もいてた
り、讀みかへすこと三度。
三岳子笑ひに來り、笑ふて去る。
夕榮の雲うるはしう薄れゆきて、晚鴉時にくぐ頃、わ

れは弟の奥津城に詣でぬ、携へし花を手むけてぬかづけば、たゞありし世の事のみ、思ひ出でられて、はらくとちつる涙れさへがたし、まれにくる夜はのあらしのわびしきを、たへず苦の下に聞く弟の靈やいかに！、去らんとして去る能はず、返へらんとしてかへるあたはず、たゞ涙のみおもかりき。

夜に入り、野分ふきいで、眠られず。

四日

いと清らかなる秋の日より、南窓の障子うちあけてぞむ程に、天使とやいふらむ、羽袖かろげよ飛び來れる蝴蝶の、鳳仙花に翅をやすめて、何やらん少女子にさゝやけるさまなり。

わが水瓶の薰りよき菊の花を知るや知らずや。

と見る、隣家の野良猫、塀越しに來れるを、我が投げたる石におどろかさされ、ニヤンともいはずして去る。

五日

湖東社月並會の日なり、されど、かねてより山行き約

ありければ、あながち出席せずとも、兼題のみあくらはやと思ひ、るの月の題を見れば「秋眺望」になむ、ありける、とりあへず筆をとりあげて、

るばの花しろきが中に寺みわた

蝶のあそべる小春のどけき

丘こそば色つく柿のかつみえて

山村一里梭の音きこゆ

としたゝめ、下女にもたせやりつ、われは腰辨當に杖を携へて、友の居城をおどろかし、一日の清遊をなしぬ。家にかへれば、我待ちがほなる菊の花、事なくてなむ。この日、病院に外科の大手術ありき。

六日

きのふの疲れにや、昨夜囁語にたからかなりき、と家人に笑はる。菊の花なほ恙なし、去にし日の晝に再び筆を染め、筆のしぶりて運ばざるに閉口す、終に果さず。

東なる友に書を復し、午餐をしたゝめてまた床に入りぬ。

七日

朝來、ふりみふらずみ、のきばにつたふ村雨のつゆ、わが心をいたく動かせり、口よりいづるまゝ之れを友に送りぬ、

桐の葉はそや二つ三つちりりめて

軒端さびしく村雨のふる

あはれにも咲きおくれたる夕顔の

やどに秋たつ村さめの露

八日

今日、やうやう、しほれたる姿の花をうつしたへり、許せよや妹子よ、まゝならぬ藝術かな、さきよはあまり紅のにじりて、美はしく色香もみぢりしを、いまは淡にして凋れたるうれをうつしたる果敢なさよ。

さりとて破るべくもあらねば、いなみて妹に參らす、妹の子大に欣ぶ。

やゝ色あせたる花びら二つ三つ、心ありげに散りぬ。

午後、風流の心にひかれ、秋の暮景いかならむと久しぶりに野邊にいづ。

黄稻すでに刈りとられていと寂しき小山田のほとり、破れ笠いたゞける骨十文字の案山子、今又休れむとして覺束なげよ立てる様うあさましき、殊に雀の二羽一羽、あなどるが如く翻れる面白さよ。

九日

露西亞の形勢いかならむと、新聞うかがうに、まづ事なきがごとし。いつしか水瓶の菊しほれゆきぬ、前裁に老びたる梅の木の下、手水鉢に金魚のむくろを見出だしつ。「金魚を葬る辞」、新体詩としてなる。

十日

京なる友より書をよせて、某郵便局長が父なる怨水翁八十、母なる〇〇子七十の賀に、玉咏をわかつてと、又ろの文の終りに曰はく、

心なくねもひを秘めて君もやらで

わが歌さきぬさみは知らじな

と。

われはたゞちに答へ、卅一文字を並べてつかはず。

百年を去年とほぐまでさかぬませ

あます二十年あます二十年

たまくしげ二見のいはのこしゑに

いませみしめのくちはてんまで

十一日

山田の伯母を訪はんと欲し、柴戸を出でしが道にして友に遇ひ、家にかへる。菊すへに老いたり、日ならずして空しからん。

軒端の夕やみを、蝙蝠ひくう飛んで、薄紫なるみ空にか
いやし星の光、愁しげにみえ、秋風古簾を揺かして聲あ
り。

この夕、窓に凭りて暮れゆく秋の夕風を仰ぎつゝ幸なき
友の運命を悲しみ、沈想に、ふけること久しかりき。

十二日

水瓶の菊、ひろく花ちりて、枕の上ほとくくまなし、
年わかき下女のつぶやきつゝはらふ、葉枯れたる二つの
枝、花はとくに失せたれども、戀しき妹が愛の手の、か

たき契のかはらずば、しかすがにすつるもたしや、さり
とて、さりとて……………、空しく桑畑のすみに捨てか
れんとす。

虚無僧二人門よりいたり、下女と口論す。

高橋子來り、群咲子來る、一哉子來らず、菊日記こゝに
筆を投ぐ。 (完)

○歌反古

醫一 野村 雨城

おしみつる乳母にもらひし菊の花われにはあらず分つべ
き友

夢よみし君とふたりの紅葉狩りけふのうつゝのうつゝと
もなき

この冬のやすみのひまに君さませ歌れもひつゝ歌がるた
せむ

瀧壺にさかまく水の二千丈しぶきにまふよ散るよもみち
葉

あはれこの足のつかれも何ならずこの丘越せば我か友の

むら

弘法の袈裟かけしとふ松老ひぬ松にちなめる僧また老ひ

ぬ

舟もゆかず雲もうごかぬふのあさけ鏡なす湖にかもめ二

羽みゆ

かぜに散る銀杏のねち葉かきよせて烟となして歌よなを

ばや

新墾のくは畑三里もしろく兎にげまどふ朝ぼらけかな

わが宿のかさねよさける白萩を一枝ありゆく誰が子なる

らん

村人が狩りえし熊をほふるべく松の火みわたて聲かしまし

き

われとかが胸の煩悶をなくさめて病院をたつあきの夕暮

黒波のあらうのいに名を呼ぶ子母は泣くらんとまやの

火影

おばしまによれる京の子琴抱きて何おもふらぬ夕月のか

げ

會報

○本會役員

(明治三十六年九月)

本年度本會役員は左の人々を囑託せられたり

會長

高安 右人

副會長

櫻井 小平 太

理事

佐々木 達

代議員 計見 雄藏

中村 徳藏 柴原 外男

小黑仁太郎

白井順太郎 高 保二

吉田 豊馬

書記 高柳鎌次郎

永山 一昌 石黒 重義

増野與三九

雜誌部長兼編輯部長

小川 勝 陳

委員 松田 菊治

野崎 芳孝 宇野 益之

有壁 一雄

小原 芳雄 渡邊 疆

建部鈴次郎

吉田 誠一 吉野 要

講話部長
 永井 人雄
 藤井 一雄
 柳澤 秀吉
 川勝 寛三
 木村 和義
 上田 計二

委員 金原 三郎
 小西 俊三
 伊藤 顯徳

林 篤
 谷澤 一郎
 佐々木純一郎

杉部 多米吉
 藤井 保二
 栗原治三郎

深澤治三郎
 熊野 勉造
 溝口 龍三

久田 徳

遊技部長
 湯 目 隆 績

委員 福見常太郎
 濱地藤太郎
 鴨脚 光榮

久我 龜
 志田 主税
 湯淺 啓一

剣道部長
 高 山 基 重

委員 小原徳太郎
 水上 俊三
 石橋 三也

長田八三郎
 大櫛 秀松
 辻 實治

吉野 新八

柔道部長
 林 常 雄

委員 三股 梅吉
 小町 環
 福田 四郎

弓術部長
 高井 魯一
 山碕内藏三
 金子 精一
 奥野 源治
 下 平 用 彩

委員 山本 幹雄
 笹田 順二
 原 久雄

宇野 正
 福田 靜
 海津 四郎

手塚甚之助

○新入生を迎ふ

曩に本校新入生を募るの時、來り應ずるもの普く全國に涉り二百數十名を數ふ、茲に於てか陶汰競争の厄に遇ひ色々此の關門を排して撰はれ抜かる、吾人は深く諸氏の前途を祝して喜び迎ふ。爾來此の幸榮に浴するの諸氏、吾人と共に十全の美を致さんことを期せられよ、

○入學式及入學生 九月十一日午前九時本校濟々堂に於て舉式、定刻學生及職員の整列位置定まるや、校長高安醫學博士は式場に現はれ、やがて嚴肅なる態度の下に先

つ學式を宣告し、次て生徒心得の五ヶ條を朗讀せられ、
ろれより在學に關する注意を懇々演説せられ式を了る、
式后各級長は別室に生徒を集め在學中遵守すべき條項を
注意せられたり今入學許可せられたる學生の族籍氏名及
ひ出身中學校名を舉ぐれば左の如し

醫學科

- 新瀉縣立長岡中學 小 黒 仁太郎 新瀉(平)
- 富山縣立魚津中學 高 野 宗 重 富山(平)
- 福井縣立小濱中學 藤 井 一 雄 福井(平)
- 新瀉縣立高田中學 遠 山 正 輝 新瀉(士)
- 岐阜縣立岐阜中學 山 村 鏑 二 岐阜(平)
- 福井縣立福井中學 長 村 吉 太 福井(平)
- 新瀉縣立長岡中學 猪 飼 善 助 新瀉(平)
- 富山縣立魚津中學 玉 森 法 靈 富山(平)
- 全 上 林 秀 雄 富山(士)
- 福井縣立武生中學 加 藤 健之助 福井(平)
- 新瀉縣立新發田中學 須 貝 猪 次 新瀉(平)

- 新瀉縣立佐渡中學 若 枝 篤 之 新瀉(平)
- 私立京華中學 高 井 魯 一 福井(平)
- 石川縣立第一中學 塚 崎 茂 石川(平)
- 富山縣立高岡中學 谷 道 清 富山(平)
- 石川縣立第一中學 不 破 才 三 郎 石川(士)
- 愛知縣立第一中學 池 部 正 鑿 愛知(士)
- 新瀉縣立新瀉中學 西 村 銀 太 郎 岡山(士)
- 福井縣立武生中學 長 田 八 三 郎 福井(平)
- 福井縣立福井中學 深 澤 治 三 郎 福井(平)
- 愛知縣立第一中學 吉 岡 鑛 作 愛知(平)
- 岐阜縣立斐太中學 佐 口 榮 岐阜(平)
- 山口縣立山口中學 武 波 峰 吉 山口(平)
- 私立京北中學 田 中 基 保 石川(平)
- 福井縣立福井中學 永 井 人 雄 福井(士)
- 石川縣立第一中學 高 木 琢 磨 石川(士)
- 新瀉縣立長岡中學 大 野 貞 雄 新瀉(士)
- 私立東京中學 坪 井 芳 五 郎 神奈川(平)

岐阜縣立大垣中學	山川宮三	岐阜(平)	愛知縣立第一中學	塚本富彦	愛知(士)
私立東京中學	島田義一	群馬(平)	長野縣立松本中學	佐藤武	新瀨(平)
岐阜縣立東濃中學	內田貞春	京都(士)	私立攻玉社中學	岡田秀造	石川(平)
石川縣立第一中學	吉田宗一	石川(平)	新瀨縣立長岡中學	川崎汎三	新瀨(平)
私立東京中學	老川雪房	富山(平)	高知縣立中學海南校	濱田眞鉏	高知(士)
福井縣立福井中學	伊坂春	福井(平)	山形縣立莊内中學	相馬甲五郎	山形(士)
長野縣立長野中學	若林古福	長野(平)	靜岡縣立濱松中學	小林茂	靜岡(平)
長野縣立飯田中學	小林唯四郎	長野(平)	福井縣立武生中學	橋本正次	福井(平)
私立獨逸協會中學	若山成一郎	岐阜(平)	福井縣立武生中學	稻川直	福井(平)
大坂府立岸和田中學	杉本常次	大坂(平)	靜岡縣立韮山中學	秋山實	靜岡(平)
島根縣立第一中學	坪内幸三郎	島根(平)	山形縣立莊内中學	千葉茂	山形(士)
和歌山縣立和歌山中學	藤田諭吉	和歌山(平)	新瀨縣立長岡中學	諸橋林太郎	新瀨(平)
三重縣立第一中學	筧連橋	三重(平)	奈良縣立郡山中學	吉田繁二郎	奈良(平)
私立大成中學	西宇忠太	岡山(平)	富山縣立富山中學	布村祥	富山(士)
長野縣立松本中學	太田勘市	長野(平)	富山縣立富山中學	永山清次	富山(平)
靜岡縣立濱松中學	稻崎重助	靜岡(士)	私立關西中學	原田悅五郎	福岡(平)
私立東京中學	朝日吳	滋賀(平)	滋賀縣立第二中學	市川久多	石川(平)

岐阜縣立岐阜中學	山田茂樹	岐阜(平)	私立正則中學	池谷運平	山梨(平)
福井縣立福井中學	栗原治三郎	福井(平)	石川縣立第二中學	白井濟	石川(士)
石川縣立第一中學	赤尾肇三	石川(士)	石川縣立第二中學	平澤兼齊	石川(平)
石川縣立第二中學	中村欣一郎	石川(士)	三重縣立第一中學	原季	三重(平)
富山縣立魚津中學	川端文太郎	富山(平)	私立關西中學	林田新平	福岡(平)
私立獨逸協會中學	加藤歟作	静岡(平)	滋賀縣立第一中學	野村義雄	滋賀(平)
富山縣立高岡中學	田邊俊之	富山(士)	石川縣立第二中學	林可一	富山(平)
新潟縣立高田中學	松村孝照	新潟(平)	私立京北中學	佐藤祐藏	山形(平)
愛知縣立第四中學	鈴木修一郎	愛知(平)	福井縣立武生中學	渡邊關重	福井(平)
廣島縣立三次中學	水口史郎	廣島(平)	滋賀縣立第一中學	桑原益方	岐阜(平)
福井縣立福井中學	池田茂	福井(平)	富山縣立富山中學	佐伯有吉	富山(平)
岐阜縣立大垣中學	臼井丈吉	岐阜(平)	和歌山縣立和歌山中學	黑田道純	和歌山(平)
石川縣立第二中學	額又太郎	石川(平)	福井縣立福井中學	伴鐸也	福井(士)
新潟縣立高田中學	鷹見義郎	新潟(士)	新潟縣立長岡中學	平澤嘉圓	新潟(平)
岐阜縣立岐阜中學	武藤匡一	岐阜(平)	岐阜縣立大垣中學	五井康平	岐阜(平)
京都府立第二中學	增井榮太郎	京都(平)	私立東京中學	水口順	京都(士)
私立順天中學	淺田耕造	静岡(平)	岐阜縣立岐阜中學	垣ヶ原長治郎	岐阜(平)

富山縣立富山中學	橋爪元吉 富山(平)
山形縣立莊內中學	仙場松齊 山形(士)
福井縣立福井中學	山田外來雄 福井(平)
全 上	志田主稅 福井(平)
私立東京中學	竹中 倣和歌山(平)
大坂府立堺中學	乾 佐平 大坂(平)
石川縣立第一中學	關川敬治 石川(平)
大坂府立天王寺中學	河野遣瑞 大坂(平)
私立神田中學	瀧澤武藏 廣島(平)
私立大成中學	古屋榮治 山梨(平)
石川縣立第二中學	柿澤雅一 石川(士)
私立下野中學	荻原卯太郎 千葉(平)
島根縣立第一中學	天野長重 愛知(平)
宮城縣立第一中學	岡 忍 宮城(士)
福井縣立武生中學	宇野 正 福井(平)
岐阜縣立大垣中學	說田順一 岐阜(平)
和歌山縣立田邊中學	玉井七次郎 和歌山(平)

新潟縣立高田中學	植木信親 新潟(平)
石川縣立第二中學	佐々木 靜 石川(平)
新潟縣立高田中學	春日 望 新潟(平)
以上新入生百拾六人	
(醫學科第三年級)	服部 環 岐阜(平)
(醫學科第二年級)	笹岡芳各 福井(平)
(全 上)	岡 一雄 三重(士)
(全 上)	山口辰五郎 兵庫(士)
(全 上)	村尾左內 廣島(士)
(醫學科第一年級)	武森秀一 三重(平)
(全 上)	庄司醇吉 石川(平)
(全 上)	阿原信次 滋賀(平)
(全 上)	田島耕平 岐阜(平)
以上は頭書の級へ再入學人員九人	
藥學科	
富山縣立富山中學	金岡清彦 富山(平)
大坂府立北野中學	津垣直吉 廣島(士)

私立成城學校中學

井上康治 大坂(平)

私立東京中學

新谷 蓋 福井(士)

私立麻布中學

奥野源治 大坂(平)

富山縣立高岡中學

吉野新八 富山(平)

岐阜縣立大垣中學

川勝良吉 岐阜(平)

私立日比谷中學

小林吉五郎 埼玉(平)

私立神田中學

吉田豐馬 長崎(平)

全 上

山脇熊人 鳥取(士)

私立順天中學

久田 德 千葉(平)

石川縣立第一中學

手塚 甚之助 石川(平)

福島縣立盤城中學

高野友衛 福島(士)

東京府第一中學

稻田 謹 長野(士)

愛知縣立第一中學

大河内 忠三 愛知(士)

石川縣立第二中學

河崎 正雄 石川(士)

三重縣立第一中學

木村和義 三重(平)

以上新入生拾七人

○撰抜試験の結果 醫學科撰抜試験は去る七月二日より

本校に於て施行せられたり入學志願者二百二十四名なりしが試験成績特に良好なりしにより百十六名に入學を許可せられたり藥學科は募集豫定人員に充たざるにより體格検査のみ施行の上十七名に入學を許可せられたり

○清國人の入學 中國江蘇省松江府上海縣人王建善三十二年は本校醫學科傍聽生として十月十九日入學を許可せられたり因に記す清國人の入學は今回を以て嚆首なりしと

○卒業生諸君を送る

夫れ浸々乎として究まりなきは我が醫學か

老朽の去るもの新分子の代はるもの斯界の面目は益々新なりと雖も而かも社會の需用を告ぐることに尙ほ甚だ急なり、此の時諸氏が切磋の學理を以て修養せる敏腕を振はんとす、快なる哉。

願くは新警精竅、益々其の濫奥を究め實地の運用に於て亦遺憾なからんことを期せよ。

余輩今や諸氏と分る、言はんと欲すること轉た切な

りと雖も、多くは諸氏の了せらるゝ所、又駄辨を贅せざるべし。唯だ茲に諸氏の健康ならんことを祈り、諸氏が職掌を全ふせられんことを希ふ

○卒業式

十一月六日午前十時より本校濟々堂に於て醫學科第十六回藥學科第十四回の卒業證書授與式を舉行せり。定刻に先きたち、職員學生及卒業生は、御眞影を拜し、次て來賓及保證人入場着席あるや、高安校長は醫學科卒業生四十一名藥學科卒業生四名に卒業證書を授與し、了りて左の告諭を朗讀せられ、醫學科卒業生惣代小林孝一藥學科卒業生惣代清水末吉氏の答辭にて式全く了り、別室に於て一同に茶菓の饗應ありたり

校長の告諭及卒業生の答辭は左の如し

告諭

卒業生諸子本校ハ茲ニ諸子ノ爲メニ此式典ヲ舉ゲ貴賓ノ臨場ヲ請ヒ以テ諸子ノ正ニ本校所定ノ課程ヲ了シ本校卒業生トシテ必要ナル品格ヲ具備スルコトヲ證明ス

是レ實ニ諸子ノ榮譽ニシテ即チ數年一日ノ如ク刻苦黽勉シタル効果タリ然レモ此榮譽アレハ則チ責任モ又之ニ伴フ自今以往諸子ハ社會ノ機關ニ參リ醫學ニ藥學ニ從來養成シタル實力ヲ根底トシ克ク獨立自重ノ氣象ヲ保持シ學理ヲ研キ實用ニ勵ミ終始怠ラザルコト猶ホ本校ニ在ルカ如クシ以テ國家保育ノ恩ニ報セザルベカラズ是レ諸子將來ノ責任ニシテ即チ今日ノ榮譽ヲ全フスル所以ナリ諸子旃ヲ勗メヨ

明治三十六年十一月六日 金澤醫學專門學校長 高安 右人
從五位勳六等醫學博士

答詞

回顧スレハ生等本校ニ遊ビテヨリ茲ニ四星霜コノ間諸教官ノ懇切ニ指導訓誡ヲ賜フコト恰モ母父ノ慈愛ニ於ケルガ如シ今ヤ辛フシテ醫學ノ一般ヲ學ビ得テ校門ヲ辭セントス生等ノ光榮何モノカ之ニ加ヘン、今又校長閣下ノ懇篤ナル告諭ヲ辱フス然リ世ノ辛酸ニ堪ヘ社會ノ波瀾ヲ凌ギ身ヲ立テ業ヲ施スハ遠ク學窓ノ苦學ニ比スベカラズ其或ハ濟生ノ任ニ當ルト或ハ進デ學術ノ蘊

奥ヲ研鑽スルトニ論ナク不肖ナレド自ラ識ル世ノ須ツ
所ニ足ラザルヲ然ル生等ノ胸中一ノ奇ナシト雖亦以テ
徒ニ井底ニ啼クニ忍ビズ敏慧ノ才ナシト雖一意ノ專念
志ヲ斯學ニ篤シ以テ國恩師恩ヲ報ジ今日ノ榮譽ニ應ヘ
ントスルモノナリ乞フ閣下幸ニ安セヨ

明治三十六年十一月六日

醫學科卒業生惣代 小林 孝 一

答 辭

生等笈ヲ本校ニ負ヒテヨリ既ニ三年始メテ社會ノ一重
任ニ當ルヲ許サル之ヲ以テ吾ガ金澤醫學專門學校ニハ
本日ヲ期シ卒業證書授與ノ式典ヲ舉ゲ加フルニ貴顯紳
士ノ臨場ヲ辱フス 生等ノ光榮大ナリト云フ可シ 生等今
回ノ榮譽アルハ固ヨリ聖明ノ御懿德ニ據ルト雖モ亦校
長閣下並ニ諸先生ノ懇篤ナル薰陶ニ依ラズンバ有ル可
ラズ豈ニ感謝ノ辭ナクシテ可ナランヤ今又校長閣下ヨ
リ懇到ナル高諭ヲ賜ハル 生等身不肖ナリト雖モ枚々矻
々高諭ニ服シ益々藥學ノ隆盛ヲ計リ以テ聖意ノ万分ノ

一ニ奉ジ一ハ諸先生ノ洪恩ニ報ズル所有ランヲ期ス
聊カ蕪辭ヲ陳シテ答辭トナス

明治三十六年十一月六日

醫學科卒業生惣代 清水 未 吉

醫學科卒業生 四十一人

- | | | | |
|-------|-------|-------|-------|
| 長野縣平民 | 小林 孝一 | 石川縣平民 | 河崎 有作 |
| 鳥取縣平民 | 政山 龍雄 | 富山縣平民 | 花岡佐太郎 |
| 富山縣平民 | 春田久太郎 | 新潟縣平民 | 諸橋嘉久次 |
| 奈良縣平民 | 山田 信之 | 静岡縣平民 | 井上 隼雄 |
| 京都府平民 | 高橋 半也 | 富山縣平民 | 館 昇榮 |
| 新潟縣平民 | 小幡 學雄 | 富山縣士族 | 齊藤 賢德 |
| 長崎縣平民 | 太田 友市 | 滋賀縣平民 | 堤 泰造 |
| 岡山縣平民 | 三宅 始一 | 岐阜縣平民 | 羽根田信次 |
| 新潟縣平民 | 谷 民次 | 石川縣平民 | 松田 研吉 |
| 山梨縣平民 | 清水 齊雄 | 新潟縣平民 | 和氣 二郎 |
| 神奈川平民 | 中村 辰八 | 長野縣平民 | 細田 榮 |
| 富山縣士族 | 前田 豊作 | 山梨縣平民 | 桑島 貫一 |

石川縣士族 吉井康次郎 石川縣平民 石田 伍佐

福岡縣平民 笠 雋吉郎 富山縣平民 林 良吉

石川縣平民 永江 直之 新潟縣平民 小野 謙三

長野縣平民 鳥山 正彰 福井縣平民 加藤 寛

秋田縣平民 小山田繁二郎 三重縣平民 高崎 二郎

東京府平族 松波 操 長野縣平民 月原 秀範

北海道廳平民 根守 政記 石川縣平民 小島 顯治

長野縣平民 須田嘉三郎 滋賀縣平民 堀田 圭三

福井縣平民 橘 三九

藥學科卒業生 四人

石川縣平民 清水 末吉 富山縣平民 中田德次郎

石川縣平民 林 京次郎 石川縣平民 高森万次郎

○卒業生諸氏送別會概況

歲華は杼の飛ぶよりも早く、一度絃を離れては再び還らぬ梓弓の遂に引き止むべくもあらで我等は去り給ふ諸氏を送るの今日とはなりぬ。喜ぶべきか、將た悲むべきか、ひそかに想ふ諸氏俊秀の才を抱き撞天の望みを持し數年

の瑩雪に其器を磨き今や業を卒へて此地を去らる、諸氏の心胸果して如何なるらん、我等端りなく諸氏の境遇を思ひ回らせば欽羨の念あさふる能はず、喜ぶべきは諸氏の身上なるかな、後進我等只昨日みし人のれも影を見るよしもなく、我等の先輩として啓發誘導に力め給ひし諸氏を雲山のあなたに送るとし思へば吾人が惜別の情は措く能はざるものありと雖も亦諸氏將來の爲め雙手を擧げて歡送せざる可からざるなり

即明治三十六年十一月六日卒業證書授與式終了後筵を本校濟々堂に布きて卒業生諸氏を送る、來會者高安校長始め其他一百有餘名、席定まるや發起人惣代池田恒太郎氏起ちて同會の趣旨を述べられ次で卒業生總代小林孝一氏の謝辭終りて愉快なる講談を耳にして晝餐を供す、固より佳肴珍羞の備なしと雖も而かも會員諸氏の焰々たる熱情は靄々として宴に充ち各自胸襟を開きて且食且談し滿場爲めに馳蕩たり、時己に午后四時乃ち卒業生諸氏の萬歳を三呼し談笑熙々歸路に就きぬ

○高安博士の祝賀會

明治廿一年大學を出て當地に來りて教鞭を執られ主として眼科部に就事せらる、尙ほ第四高學校醫學部主事として大に敏腕を振ひ校務の擧りて見るべきもの多かりき。明治三十二年文部省の命により獨國に留學すると二年、眼科を専攻して益々其の濫輿を研め講究愈々深く、精透卓拔、新警探微、悉く腦裡に脩めて歸朝せらる。時恰も本校の分立後にして山崎教授校長心得の任に當らる、更に又同教授の留學を命ぜらるゝや、其の後を慕けられ校長として教授として再び本校に臨まるゝことゝなれり。其の後論文を提出して博士の學位を請求せらるゝや審査の結果今日の榮譽を博せられたることは前號に報せしところなり

先生が此の榮譽を負はせられたる時、熱情ある子弟何ぞ黙すべき、必ずや祝賀す可き微衷を露はさざる可らずと其の謙己に熟せり。此の時に當りて醫員及醫師諸氏の間よ於ても夙に先生の爲めに祝賀會を催さんとの計畫あ

り、學生の發起あるを聞き同種の會合を二途になすの繁は宜く避くべし、若かず兩團合併して大に盛況を添へては如何と、協約直に成る

天高ふして意氣昂然、回轡紅錦を点綴して又甚清雅、東籬の菊花獨り艶姿を擅にして麗容佳、誠にこれ秋天の美景、快晴金澤稀に見る所、十月三十一日之れ則ち開會の期日なる。來賓の來り學生の集まるもの近時稀有の盛會となす、憾くば濟々堂狹隘にして各人肩胛相接し兩膝相交はり場に立錐の餘地なく、來賓の諸賢嚙々や窮屈を感じられしならん

時は來りぬ開會の刻午后二時、第一鐘學生の入場、第二鐘會員の入場、次に一同起立して正賓高安博士を迎ふ。着席せられてより發起者惣代淺野川病院長米村吉太郎氏立ちて開會の辭を述べ

先生の赴任以來、醫學部々長として眼科部長として將た學校長として本校に盡さるゝこと洪大、數萬の患者を治するに好く學理を運用し、施療其の宜しきを得今

や先生の恩恵にあづかるもの北國に普し、茲に博士の

學位を得られたるは誠に其のところ、例へば暴食して
腹滿つるの類、狂喜して之を祝福するを要せん、然り
この合理の榮譽と雖も余輩深く先生の恩義に浴するも
の、洪大なる師恩に感ずるもの、聊か以て祝意を表さ
ざる可らずと意を博士に通ず、然るに博士、固辭する
よ自己の貢献の擧らざる將た現下の形勢に鑑み其の當
を得ざるとの故を以てす、先生の浩徳常に宇内の形勢
に見、社會の現時を嘆ずるや深し、今此の辭ある固よ
り故ある可しと雖も、吾人の熱誠は之によりて制止せ
らる可さ乎。夫れ苦あれば之を別ち樂あれば共にたの
しむ、正に是れ師弟の情よあらずや、斯會元より薄茶粗
果の類のみ、亦先生の意に逆ふなからんことを期す、願
くは余輩發起者一同の微衷を了せられよと、辛く先生
の許諾を得茲に本會を成立せしむることをなたるなり

との旨を陳し併せて祝辭を述べられたり

次に來會者總代加藤慶三氏の祝辭朗讀あり

祝辭

天高く地ハ錦ヲ飾ルノ時茲ニ本日ノ佳辰ヲトシテ吾輩
敬セル高安博士ノ爲メニ學位祝賀會ヲ開キ聊カ祝意ヲ
表スルヲ得タルハ會員一同ノ光榮トスル所ナリ博士ハ
明治二十一年以來高等中學校高等學校ノ醫學部金澤醫
學專門學校ニ教鞭ヲ取ラル、ト共ニ主事トシテ校長
トシテ後進ヲ薰陶示導セラレ又金澤病院長眼科長トシ
テ療病治術ノ効果ヲ擧ケラル其ノ間學ヲ研キ術ヲ究メ
尙獨國ニ遊學セラレテ斯學ノ濫奧ヲ探ラル今回名譽ノ
學位ヲ得ラレシ正ニ其ノ所ナリ今後博士ハ吾醫界ノ重
鎮トシテ尙一層ノ敏腕ヲ奮ハレ社會ニ裨益ヲ與ヘラル
ノ責任ヲ担ハル、事ト信ス茲ニ於テカ吾人ハ吾醫界
ニ光輝アル一星ヲ加ヘシヲ祝スルト共ニ博士ノ名譽ヲ
賀セサルヲ得サルナリ 謹テ祝詞ヲ述フ

明治三十六年十月三十一日

高安博士學位祝賀會會員惣代

加藤慶三

贈品目錄(書柵壹個)を呈上す

次は醫學專門學校學生惣代林篤氏の祝詞朗讀あり

祝詞

謹而我金澤醫學專門學校長恩師高安閣下ニ告ク夫レ熟々惟ルニ閣下ヨク公務多端ノ身ヲ以テ生等ニ懇篤ナル教鞭ヲ執ラル、事多年一日ノ如シ而シテ傍ヲ煩務ノ餘ヲ以テ益々斯道ノ濫奥ヲ究メ曩ニ有益ノ論文ヲ提出セラル、ヤ遂ニ去ル七月二十九日ヲ以テ醫學博士ノ學位ヲ授與セラル是レ恩師閣下ノ光榮ニシテ併セテ我國醫學ノ啓發ヲ推輓セラレタル功績モ亦タ寡トセス延テハ本校ノ名譽タリ是ニ於テカ日々教訓ヲ受クルノ生等胸裡欣悅ノ情ニ堪ヘス爲メニ一同相計リ本日ヲトシ茲ニ祝賀式ヲ舉行シ聊カ紀念トシテ粗瓶ヲ贈呈セントスル所以ナリ希クハ閣下生等微衷ノ存スル所ヲ了セラルレハ生等ノ幸榮焉ソ之レニ若カン 茲ニ一言以テ祝詞ニ代フ

明治三十六年十月三十一日

金澤醫學專門學校學生惣代

林 篤

學生一同の紀念品(花瓶壹個)目錄を贈呈す

次に祝電披露あり

謹而祝シ御健康ヲ祈ル

東 良 平

恩師ノ學位受領ヲ祝ス

本 田 三 郎

盛會ヲ祝ス

黒 川 由 己

是に於てか高安博士壇又登らる、壇の右側には花瓶を設け翠松黄菊の插花よく清冽の色彩を添へ、恰も先生を拱くが如し、先生壇又立つ拍手湧くが如くに起る、先生口を開く急がず迫らず襟度甚だ鄭重、知らず其の演ずる所は如何。乞ふ概要を記せん

余が當校に來りてより職を奉ずること十有數年其の功績些の見る可きものなし、然るに文部省は二ヶ年の閑を賜ひて僞國に遊學を命ぜらるゝや、諸賢は不肖の爲めに盛大なる送別會を催し、縣下よりは慰勞として過大の金を贈られ、學生よりは丹心以て鑄たる紀念品を、

今尙ほ胸間に飾るものは之なり。而して又朝に歸るときも等しく諸賢の高遇に接す、ア、諸君の情に濃き、余は一念以て其の恩惠に報答せんことを期するのみ、然るに今博士の學位を受けたるを以て又々祝賀會を開かれんと聞き、實に身にあまる過賞なるを信じて固辭せり。思ふに學校の事業、院内の事、今尙意に滿つるものなく、且つや内、行收整理に忙はしく、外、日露の形勢日に非にして國家は誠に多事なるのとき、一個人の爲めに祝賀會を開かるゝとは余の首肯し能はざるところなり、然るに情に厚き諸賢、余を遇するに至らざるなき諸氏が曲げて應ぜよと強ゆる、余は深く是に答ふる所を知らず唯だ這の厚意を空ふせざらんことを期して出席することとせり——歸朝後も病痾の爲めに勉學の暇を得ず強て又博士たらんの慾望もなかりき、學位元より輕するものゝあらざれども望めば誰人も得らるゝもの最上名譽ある特産物とは思意せざりき、然れども偶、世上の風評又動かされ又時勢の之を要とせ

しむる所より實に國家に對する報恩の爲め之を請求せしと雖も初めより期するところに非ざれども、僥倖にして今日あるを得たり、之れ全く諸氏又對する從來の鴻恩の萬分の一に報答せんが爲めのみ云々

更に先生は自己の來歴談に及び、赤貧より身を起して今日に至る大要の講話ありたり、夫れ今日の光榮を負ふもの其の萌すところの又甚だ偶然にあらざることを見る。

卿は佐賀縣肥前國一寒村、誠に陬階の地にあり、世々神官たり、明治六年初めて寺院に於て子弟の教訓機關の開かるゝや則ち入りて讀書算を學びぬ、時に年十四、居ると一年にして校補として下級生徒の指導者となる。

近隣に於て當時父の知己にして漢蘭兩醫を兼ねたる人あり、先生に勸むるに醫學を以てし志初めて立つ、是より佐賀市に出で、究學す、時に東京には大學起り學生の脩養稍全に近しとき、笈を負ふて遊學するもの多く、知人は皆去りて出京し先生獨り其地を殘さる、然れども蛟龍空く息を吞んで潜在すると能はず、先生も

亦同僚の後を追はんと勃然抑へ難く父に迫まりて之を促すと急なり、然れども家貧よして資に乏しく、加ふるは海陸の通路開けず多額の金を投じて我が希望を容るべくもなしと煩悶すると三度、時に先生聞くらく大學は數年ならずして官費生たることを許可すべとして、父に説くにこの事を以てし漸く諾せらるゝことを得たり、ア、此の時先生の満足や如何、かくて月の六圓宛の學資金を與へらるゝこととなり、飄然として孤客今や家庭の慈父母と分かれ天涯遠く旅路に上る、時に明治九年なり。之より外國語學校に入り普通科を修め止まること一年、遂に大學豫備科に入り、進んで本科を修め全科を卒へられたるは實に明治廿一年一月なり。斯の如きは僅かに其の一端なり未だ全豹を窺ふに充らざる可し、先生の行路之を回顧し來りて説かるゝ所は實我青年の模範たるべきも多からん、余は他日先生の歴傳を傳ふるの期あらんとを希ふ。

かくて先生は其の當時に於ける修業卒業開業免狀證等を

示され、終りに今回受領せられたる學位記を展覽せしむ。先生壇を降らる。拍手喝采の下に式を終へ、直に茶話會に移る、時に午后三時半なり

茶菓元より珍とすべきものなしと雖も、會員の諸氏は概ね現代の紳士、而かも學生と席を等して澁茶粗菓に甘んじ赤誠以て賀辭を表するの風情は現今流行の宴會と比して誠に神聖而かも十二分の快を得られしと共に、先生に於ても又大に満足せられし所なる可し。聽て此の靄々の裡、和氣陽々として將に春の如く、講談あり、狂言あり、抱腹絶倒、快は益々快なり。既にして日は暮れ燈点せらるゝの時茲に閉會を告げ

両陛下萬歲、金澤醫學專門學校萬歲、高安博士萬歲を各三唱して散會す、午后六時

本目の會員としては本校に縁故ある醫員及醫師百五十餘名、學生全体、其の他、石川、湯目兩教授、北國、政教、加能新聞社々員等無慮五百餘名

行文中演說記事は総て記憶に存せるものゝみ若し眞意

を誤まるものあらば其の責一切余にあり、乞ふ諒せよ
(つとむ)

○秋季遠足運動會

我が遊技部の壯舉、那谷の巖窟に入りしは一昨の秋、片山津温泉に遊んで湖畔の景を探りしは昨の秋、尙ほ當年の俛は彷彿として腦裡に出没するものあり。今秋亦山代地方に於て此の事あらんとす、先年初めて秋色の佳を知りてより一度此の報に接するあれば、遊意勃如として動き、恍惚として神先づ聘す。況んや人あり其の地紅葉の盛を報ずるをや。加ふるに健脚強歩の長途競争も例の如く、健兒の肥肉を慰するものあらん。時は是れ一年の好期十一月十四日、筆は是れ禿拙劣の文字、是の候、是の筆、其の及ばざるや遠し。

夢よ聲あり恍として眼を醒せば宿主の我を起すにありけり。時已に五時に垂んとす天空清きこと稀に號報鳴りて己に一時直よ起き。我直に起きて行装を整へ、出で歩を停車場に急げば、殘んの月は尙ほ天空にかこり、

曉未だ星に繁く路傍を照して明かなり、昨日まで降り續ける秋天の今日こころ晴れて我が思へ、時なる哉。既にして停車場に到れば學生の集まるもの場に滿つ、一同列をなして乗車す、五時四十五分、汽笛一聲、煙は北になびき、瀛車は南に走る、東、卯辰山を望めば朝暎の光り赤く、田野は遠く霧に圍まれ、ねく霜白くて窓外の流峽一轉、又一際の際めあり、或は新聞を開くもの、地圖を繕くもの喫煙するもの、論談口角泡を飛ばすもの、吟するもの、謠ふもの、笑ふものあり。湯ノ目先生が例のサツクより獨逸唱歌集を取り出して唱ひ始しむるなど、津々たる興味盡くるところなく、瀛車は松任驛に着しぬ、東雲益、紅日輪は將に出でんとして未だ現はれず、連峰輕烟浮々として面を掠む。出でて進めば手取川あり、西、日本海に注ぐところ、淼漫たる蒼海に一二白帆の擧るを見る、豁然として窓外亦無限の快に打たれぬ。美川驛に到らんとする時太陽山の端を離れて輝き、白雪と相映ず、憾くば白山の高峰白霧に覆はれて見る可らざるを、小松

驛に到る先年の俛を止む。動橋驛に着すれば一同下車し停車場前に集まる。長途競争は之れより山代に至る間里程凡ろ一里九町、是に於てか各団体を組織して競争者を區別す、鉄脚の健兒來り投ずるもの多し。

余脚弱くして列に入ること能はず、若かず意の向く所に歩いて漫散壇に此紅錦の秋氣に浴せんと、前發山代に向ふ。靜邃幽寂の地、塵俗の汚氣を洗ふて英氣再び蘇せしめんとは心切かに期する所、本日の行や甚だ我意を満足せしむるものあらん。然り遠く俗界を去りたる余は、曠遠千頃の野を縫ふて進み七日市村に至る、時に競争者の駈け來るあり、前途尙ほ遠ければ勇を鼓舞して意氣を加へ遣りぬ。遠く眼界の及ぶところ皆な紅葉一帯の光景、實に二月の花より紅なり。西鳥村を過ぎて進めば遙に編々たる國旗の交叉せるを見る可し、之なん徒歩競争の決勝点なる、セツセの聲後にさきゆ顧みれば第二回の競争者なり、決勝点の見ゆるまゝにへび掛けて飛び出すことの壯なる、流汗淋漓顔を拭ふに暇なく互に凌ぐ勝敗の

決、名譽の勝負、ア、何ぞ盛なる、己に進んで決勝点に到れば、松田先生机を擁して時計を見、時間算して勝敗の決を定む。之より直に山代村に入る

村の中央方形をなせる所、一大浴場を設く、土人之を總湯(或は外湯)と云ふ。其の建築を見るに、堅牢宏大二層の樓となす。湯槽は石を以て造り、男女を兩割して各槽百人を容る可し。此の周圍は悉く、宿舍、軒を並べて建ち、戸々又内湯を設く、學生休息は總湯に面じて西方山下家に在り、則ち入る。先入の諸氏は入浴を終へ、欄よるもの、横臥するもの、起きるもの、早や晝飯を開くもの、茶を飲むものあり。新たるに來るあり、出づるものあり、必勝を期するものあり、敗北を嘆ずるものあり、中途は落ちたるを惜むものあり、何れも之れ分秒の争、確報至るに非ざれば五里霧中、彼我の勝敗は全く知るに由なし、尙ほ出發せざる者あり、出で途中にあるものあり。全部完結、打算の上ならざれば知ること能はず、只だ之れ賞牌授與式を待つのみ。既にして一浴を試みる

よ泉質亞爾加里泉に屬し、少しく溷濁、微く硫化水素の臭を帯び、味稍々鹹し。先きに本校よ於て分析せる成績を得たり、參考の爲め茲に掲ぐ

反應、微亞爾加里性

溫度、常溫攝氏十五度半に於て同六十六度

一〇〇〇立方「センチメートル」中に一、七〇四〇〇〇瓦

の固形成分を含有す、其の各成分は

硫酸加爾叟謨 〇、七一八〇八〇

格魯兒加留謨 〇、六〇五二〇〇

硫酸加留謨 〇、三三六一一〇

格魯兒那篤留謨 〇、〇一〇五六一

格魯兒麻屈涅叟謨 〇、〇〇八三一〇

鉄及礬土 〇、〇一九〇〇〇

硅酸 〇、〇五七九一三

礬酸 少量

炭酸 少量

磷酸 痕跡

硫化水素

〇、〇〇五四四五

外浴の外また内浴して効あり

今其の來歴を釋ぬるに千二百年前、僧行基、北陸巡錫に際して之を發見し、其後長徳年間に至り、花山法皇の北國を遊幸せらるゝや、又瀛煙の擧るを望ませられ、一浴甚だ爽快を覺せさせたまふ。依りて樂王寺を再興し、從ふ所の比丘妙覺を留めて護國安民を祈らしむ。是より其の名近隣に響き來り浴するもの絶へず。然るに天文年間、越前の國守朝倉義影の侵す所となり、空しく兵燹の熾となる。其の後前田利長卿、由緒の尊に感じ、再び餘燼を取め、山林田畑を賜ひ賦税を免じ饑災を祈願し、奇驗を賞揚し傳へて以て今日に至る。

出でて東すれば、縣社服部神社あり其の境内は即ち公園たり、風光未だ甚だ備はらざれども老樹鬱鬱として枝を交む、微風梢を渡り紅葉片々として飛散す、颯々として鳴り鈴々として聲をなし林間の土上錦を敷く、東方、小丘の連なるところ之を春日山と云ふ。蜿蜒たる一帶滿山翠

松の林をなす、若し夫れ登りて山頂に至らば眺望自ら塵腸を洗ふに足るものある可しと雖も、閑遊の隙なきを奈何せん。路を轉して山中温泉に向ふ、進めば大聖寺川あり、河は大ならざれども水清くして淺く潺湲として水聲甚だ激せず、前面視線の行く所、淡粧濃彩凡て宜しきと得ざるものなく紅なるもの赤なるもの緑なるもの黄なるものあり、布置の妙着色の奇、立田の姫の織りなせる衣か、あらぬか、塗抹せられたる天然一幅の活畫に似たり。橋を渡りて左折、河流を溯れば左右回巒、滿目の光景愈々清冽を覺ゆ益進めば益々佳、河を隔て、對崖を望めば、兀如として山骨の現はる、所、矮松其の上に聳たり。坦々たる大道、羊腸として逶迤すと雖も、山笑水媚みな我を迎ふるもの、如く送るもの、如く、足甚だ軽くして時の移るを知らず。行くこと一里半則ち達す。

人家稠密而かも清楚を極む、戸數六百有餘實に山間の小都會なり。宿舍樓屋の華麗室内庭園の裝飾風趣を極め、懇遇款待して浴客を待つ。村の中央に至れば二大浴場あ

り、一は一般士民浴客の爲め一は貴顯紳士の爲めに特ゞ造營善美を盡し自ら等級を區劃す。今其の泉質を聞くに鹽類泉にして味に澁歛あり、外浴内服共に良効を見ると、其の來歴を探ぐるに行基菩薩、嘗て北國行脚に際して之を發見し狩野遠久をして浴槽を設けしめたるに創る。其中絶して煙滅に歸せるも今より七百年前長谷部兵衛尉信連(當時中江沼郡塚谷保を兼領せる)此の附近に鷹狩せる時、偶々白鷺の來りて患脚を浸すを目撃してより此處に靈泉の湧出することを認め、臣下をして之を開拓せしむるに及んで再び世に現はる、に至りぬ、其の後文明五年蓮如上人、越前の藤島に留錫せる時、當地に湯治せられてより其の名曠く世に喧傳せらる。

此の地三面山巒を回り大聖寺川の上流其の間を流る、茲に閑潔清冽の風景山光水色の見る可きものあり、所謂山中十景を數ふべし。幸に十分の餘暇を得ば悉く之を探りて未聞の諸氏に頌たんと欲すれども、一日の行軍而かも漸くにして此處に到るもの、豈裕々の閑あらんや、只だ

一二清絶の別乾坤に歩して渾身の秋色を擅にせんと則ち東山の遊園に入らんとす、溪流の聲あり近き視れば十勝の一黒谷なり。巉巖怪石崢嶸するもの凸然怒起するもの渦驥雖り天貌馳け、狂風大空に吠ゆるが如く、奔流之に激せば鏘然松籟の聲をなし、湛へては又數尋の淵となる。橋を架す黒谷橋と云ふ、之を臨めば魚類棲游を見、清轍又沙石を數ふ。渡りて東山に登れば満山の紅葉秋錦を飾り、一囑の眺望指顧の裡に集まる。是に郷人山下文卿の碑あり、氏は徒弟學校を起して漆器の改良を獎勵し今日の隆盛を致せるもの大に氏の養成に俟つものあり。山を降りて南すること四五町、再び大聖寺川の溪澗に到る、巨巖累々盤桓として蛟龍の蟠まり、猛虎の嘯くが如く、清流之に碎けて白玉となり珠跳す、其の間實に千仞の淵となる、橋あり蟋蟀橋と云ふ。之れ誠に十勝の一たり、渡りて澗底を瞰下すれば恰も暈するが如し。此の削壁に二三樓屋の建てらるゝあり、客を待つ、清醇佳肴を呼んで豪遊を試みば其の快や如何!

此の對崖に島田氏の碑あり、凡谷、小杉、生水の各地を發見し公共事業に盡せる偉功を刻む。此の附邊甚だ勝地あり去るに忍びど雖も、時の遅延を恐れて空しく割愛し又再遊を期して歸る。

山代に着すれば學生多くは離散して止まるもの少なし、賞牌授與式も濟み、茶菓の饗も終りたる後なり。直に宿を辭して動橋に向ふ。羊腸たる道路先に健兒か活動せる所今尙其の傍を止む、三々五々歸路にあるもの斷又續、出又沒、みな動橋に歩む。午後五時頃着す。一度散りてより或は那谷に或は片山津に或は山中に各秋色の賞景を探り詩袋を滿して歸るもの今や悉く集合し億勞委疲、暫く茶肆に息ふて發車の時刻を待つ。時に夕空日は沒して將に点燈の刻、秋雨蕭々として到る、停車場裡甚だ雜沓す。午後五時十五分上り列車は再び三百五十の遊士を乗せて馳す。降雨の車窓に激し、燈火の明滅するところ單行の寂寞無聊に苦しむは屢々吾人の知る所、今夜の如く、祝歌高吟騒々の裡、傍ら人無きが若く

壯觀活劇の間に夜行列車の興味を覺ゆるは誠に此の遠足會の賜なり。六時十五分金澤驛に着す。

之れより例の灯提行列あり一同着校し、萬歳を三唱して

散會す時に午後七時半也

* * * * *

先きに山代に於て長途競争の優勝者として賞品賞牌を授與せられたる榮譽ある諸氏を照會せん

- 一 等 二一、三一分秒 中村 惠 (醫科四年生)
- 二 等 二二、二七 井上 只次 (同 上)
- 三 等 二二、二八 吉野 要 (同 二年生)
- 四 等 二二、五五 吉田 宗一 (同 一年生)
- 五 等 二三、五三 中村 欣一郎 (同 上)
- 六 等 二四、〇八 田邊 俊之 (同 上)
- 七 等 二四、二六 金平 鉄太郎 (同 三年生)
- 八 等 二四、三三 淺田 耕三 (同 一年生)
- 九 等 二四、五〇 水木 正太郎 (工業學校撰手)
- 十 等 二四、五〇 赤尾 肇三 (醫科一年生)

- 十一 等 二四、五二 若林 爲之 (醫科一年〇)
- 十二 等 二五、〇一 秋野 定吉 (同 二年生)
- 十三 等 二五、〇五 英 軒二 (同 三年生)
- 十四 等 二五、一〇 近藤 武雄 (工業學校撰手)
- 十五 等 二五、一〇 岡田 秀造 (醫科一年生)
- 十六 等 二五、一〇 下村 義次郎 (同 四年生)
- 十七 等 二五、一四 九谷 熊次郎 (同 二年生)
- 十八 等 二五、二八 石橋 三也 (同 二年生)
- 十九 等 二五、二八 猪飼 善也 (同 一年生)
- 二十 等 二五、三〇 小黑 仁太郎 (同 上)
- 二十一 等 二五、三二 高野 宗重 (同 上)
- 二十二 等 二五、三四 柴原 外雄 (同 二年生)
- 二十三 等 二五、四四 坪井 芳五郎 (同 一年生)
- 二十四 等 二五、五一 山下 銀吾 (同 三年生)
- 二十五 等 二五、五六 平松 敏郎 (醫科一年生)
- 二十六 等 二五、五六 仙場 俊齊 (同 上)
- 二十七 等 二六、一〇 老川 雪房 (同 上)

二十八等	二六、一三	大瀬 謹一 (解剖學助手)
二十九等	二六、一八	藤田藤右衛門 (醫科三年生)
三十等	二六、二〇	木村松三郎 (同一年生)
三十一等	二六、二八	佐藤 祐三 (同上)
三十二等	二六、二八	關川 啓二 (同上)
三十三等	二六、三四	北川 光雄 (同二年生)
三十四等	二六、四〇	池田 茂 (同一年生)
三十五等	二六、五四	水上 俊三 (同三年生)
三十六等	二七、〇七	中野 鑄太郎 (解剖學助手)
三十七等	二七、一〇	今村 文碩 (醫科一年生)
三十八等	二七、一三	吉池 省吾 (醫科三年生)
三十九等	二七、一四	内海 友七 (同二年生)
四十等	二〇	佐々木 靜 (同一年生)
四十一等	二八	中野 源一 (同三年生)
四十二等	三〇	山田伊之助 (同上)
四十三等	三八	島 誠 郁 (講師)
四十四等	三九	龍澤 雄造 (醫科一年生)

四十五等	四三	白井 清 (同上)
四十六等	二八、〇九	眞田 幸平 (同二年生)
四十七等	一六	籠 甚 (同上)
四十八等	一八	相馬 甲五郎 (同一年生)
四十九等	一九	蘆澤 昭 (同二年生)
五十等	二七	高井 魯一 (同一年生)

○實彈射擊演習

(つとむ)

醫學科並びに藥學科第二年生は去る十月廿二三兩日實彈射擊演習を上野練兵場に行へり因に記す當日に於ける好射手及其の得点左の如し但し満点三十点

丹羽 貞	十三点	平泉 泰雄	十二点
内海 友七	七点	秋山 八百藏	十一點
松山 清	十二点	村山 政治	十三点
近藤 琢磨	十点	杉戸 多米吉	十二点
黒木 隆	十五点	蘆澤 昭	十点
村山 貞治	十一點	樋口 平次	十二点

青木市太郎 十一點 桑島柳吉 十二點

西村政吉 十一點 村木淳吉 十六點

名越貫一 十一點 武内節三 十四點

井上元 十三點 土屋米二 十二點

吉武安男 十七點 津田直次郎 十三點

富田寛 十五點 松崎源次郎 十點

深町正道 十三點 深瀬陸郎 廿三點

竹内義一郎 十六點 並河正雄 十六點

郷茂樹 十二點 田中義雄 十點

松江鏝五郎 十六點

川勝寛二 二十四點 辻寛治 十一點

龍崎龍助 十二點 貴島善兵衛 十五點

以上藥學科

○醫事新聞社の雜誌寄贈 前年の例により又々第三年級

生徒一同各一部宛送呈せらる本會は同社の美譽を替し

て其の厚意を謝す

○十全會圖書の貸付 十全會所管の書籍は之れまで校外

に出すこと能はざる爲め生徒の不便甚だしきものありし

が十一月よりは之を改めて毎日(日曜日を除く)午后より

翌日午前に至る間成規の手續により校外に於ても貸し附

くることとせり

○紀念書籍寄贈 本校醫學科卒業生故米澤啓君在校紀念

として左の書籍を岡島敬治君の手を経て本會へ寄贈せら

れたり

改訂四版愛氏內科全書

鳴氏內科全書

新撰電氣療法

○石川教授より書籍寄贈 同教授出版の人體解剖學第二

卷一冊を本會へ寄贈せらる

○雜誌部記事

○十月三十日、豫算編成會を兼ねて庶務所内に委員會を

開く。

卷一より 九冊

卷一より 二冊

一冊

一冊

出席者は 小川部長、松田、野崎、宇野、有壁、小原、
建部、渡邊、永井、藤井、木村の各委員

今回は本年度の初會にして部長の更任委員の一部の改
撰ありたればにや會場、亦何となく眞面目なりき、小
川部長は就任の辭を述べられ委員と共に編輯の任に當
られるとの挨拶あり

因も多年經驗ある上野忠君が病痼の爲めに委員を辭せ
られたのは誠に惜むべし

議事

一、豫算は大要前年に差なく提出案の一同異議なく可
決

一、從來の購讀せる金澤發行の新聞を止め東京大坂の
某々新聞を改むるの議あり

(讀賣新聞、報知新聞、大坂朝日新聞?)

一、各委員の分擔を定めて左の如くしたり

醫學科四年級委員 原著(雜誌、抄録とも)漫録
同 三年級委員 會報(大)漫録

同 二年級委員 會報(小)漫録

同 一年級委員 通信 漫録

藥學科各委員 藥學部に於ける全部

主要議事終りて四時半散會

當日の欠席委員は醫學科二年級、藥學科一、二年

○第三十號編輯會十一月廿八日午後二時より庶務所内
に開く

小川部長、松田、宇野、有壁、建部、渡邊、吉野、永
井、藤井の各委員の出席

小川部長より豫算會の結果を報せらる

長へ休みに嘸ぞや玉稿も嵩むならんと編輯子が甚だ囑望
したるに意外の結果、集まる原稿は實に少なく殆んど取
捨すべき餘材なかりき

終りも次號原稿のメ切期日を定めて退散す。午後三時半、
時恰も講話會の眞中なりき

欠席せられた方は四年で小原君、二年で吉田君、藥學科
の諸君 (つとむ)

○講話部記事

○第 回講話會 十一月廿八日午後二時半より内科教室に開く。本學年の初會として演者も聽者も頗る多く後れて來る者はさしも潤き教室内に入るを得ずして廊下に佇むもありて大會にも劣らぬ未曾有の盛況なりき詳細之次號に掲ぐべし

○弓術部大會

十一月二十九日開催の筈なる當部大會は雨天の爲めに無期延期となれり

○解剖遺體法會 卯辰山本校墓地に設置したる第三回紀念碑前より於て去る十一月廿一日解剖遺體法會を執行せらる、筈の處當日折り悪く雨天の爲め小立野如來寺に於て同日午後二時より盛なる法會を執行せられたり參詣者の高安校長を始め職員生徒大凡三百名遺族二十名計りなりき、因に記す昨年六月下旬より當日迄の解剖体の七十體なりしと

○小野貧民救助院主へ寄附金 本校職員一同より慈善家

小野太三郎氏へ貧民救助の資に供せんがため金貳拾圓を解剖祭の際寄附せられたり

○叙任及辭令

依願囑託ヲ解ク 金澤醫學專門校講師 岡島 敬治

(以上九月十一日、本校)

月手當金貳拾圓給與 金澤醫學專門校講師 東 良 平

陸叙高等官四等 金澤醫學專門校教授從六位 佐々木 達

陸叙高等官五等 金澤醫學專門校教授正七位 上田 計二

(以上十月二日、内閣)

陸叙高等官七等 金澤醫學專門校教授正八位 湯目 隆績

(以上十月九日、内閣)

不都合ノ廉アリ解職ス 雇 石黒 重義

(以上十一月十四日、本校)

全身病及腹部内科小兒科副手ヲ命ス 花岡 佐太郎

(以上十一月十七日、本校)

任陸軍二等軍醫 陸軍三等軍醫正八位 澁谷 孝慶

補歩兵第四十七聯隊附

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

橋本喜久三

補臺南衛戍病院附

陸軍三等軍醫

關口通太郎

補歩兵第十四聯隊附

全

竹下麗三郎

(以上十一月十八日、内閣)

依願囑託ヲ解ク

金澤醫學專門學校講師

島 誠 郁

(以上十一月三十日)

依願職務ヲ免ス

石川縣金澤病院醫員

高田 重忠

○本學年の本校各級幹生左の如し、但し第一年級は未定なり

醫學科第四年級幹生

林 篤
池田 恒太郎
有 壁 一雄
中西 吉郎

醫學科第二年級幹生

柴原 外男
杉部 多米吉
吉野 要
久我 三龜
石橋 也

醫學科第三年級幹生

建部 鈴次郎
谷澤 一郎
中村 德藏
齋藤 傳平
吉池 省吾
吉田 東秀
佐々木 純一郎

醫學科第三年級幹生
同級幹生第二

柳澤 秀吉
川勝 寛三

津田 直次郎
井上 久元

○會員動靜

▲一年志願兵 左の諸氏は去る十二月一日一年志願兵として入隊せられたり

歩兵第七聯隊へ

島 誠 郁 松田研吉 高森万次郎 永井直之

太田精一 福岡喜洋

歩兵第三十五聯隊へ

長崎謙治 春田久太郎 井上隼雄

東京近衛歩兵第三聯隊第五中隊へ

中村辰八

大坂歩兵第八聯隊第一中隊へ

松 波 操

▲豫備見習醫官と藥劑官 左の諸氏は第一種勤務演習の爲め去る十二月一日入隊せられたり

歩兵第七聯隊へ

野嶽利七 杉山政長 (以上見習醫官)

歩兵第三十五聯隊へ

鷺山他三郎 横井嘉亟 瓜生尹重 宮越常次郎

林 正 雄 (以上見習醫官)

新 次 郎 (以上見習藥劑官)

▲海軍少軍醫候補生 本期の應募者は廿名の處八名採用せられ本學年の卒業生小山田繁三氏は登第されたりといふ

▲久保武氏 往年我雜誌部に盡瘁されし同氏と今般名古屋市上園町一丁目二十番戸に卜居されたる由通報ありたり

▲鈴木重吉氏 昨年卒業以來郷里附近の某病院に従事されしが先般富山縣の聘に應じ縣醫として先月初旬より就職されたり

▲月原秀範氏 福岡喜洋氏の後任として越後中蒲原郡新津町病院に赴かれたり

▲政山龍雄氏 嚴父病氣の爲め卒業後直に歸坂されたるが追て洋行さるべしと云ふ

▲小林孝一氏 氏は金城病院に入り眼科部を擔當さるゝ

由

▲河崎有作氏 氏の歸郷羽咋郡高濱に於て開業の筈

▲林良吉氏 氏は小濱病院の藤原敏夫氏後任として勤務の筈

▲花岡佐太郎氏 氏は内科學研究の爲め本校内科學副手として出勤せらる

▲見習醫官 陸軍衛生部依託生徒羽根田信次氏吉井康次郎氏小島顯治氏は十一月三十日見習醫官として歩兵第七聯隊へ入隊せられたり

▲吉田幡誠氏 氏は東京醫科大學に於て外科學研究の處先般越後南蒲原郡見附病院外科醫長として赴任せられたり

▲湯本四郎右衛門氏 氏は先般能州七尾町に於て開業せられたり

▲松田研吉氏 氏は眼科學研究の爲め本校副手として勤務せらるゝ筈の處俄に一年志願兵として來る十二月入隊の由

▲櫻井副會長 氏は大坂に於ける藥劑師試驗委員として十一月廿四日より十二月五日迄出張せられたり

▲高田重忠氏 金澤病院内科醫員たる同氏は一年志願兵として入隊の爲め今般辭職せられたり後任は花岡佐太郎氏に内定せりと云ふ

○卅五年十全會收支決算表

三十六年十一月廿八日

會長 高安 理事 佐々木 書記 永山

三十五年度金澤醫學專門學校十全會々費今般別紙之通遂決算候結果收入増金五拾五圓壹錢五厘支出殘金七拾五圓五拾七錢合計金百參拾圓五拾八錢五厘之レ全ク不用ニ歸シタル金額ナリ依テ會則第十三條第四項ニ據リ資金ニ繰込タルニ依リ現在資金四百八拾六圓拾六錢貳厘ナリ

右報告候也

明治三十五年度金澤醫學專門學校十全會收入決算表

科 目	原 定 額	流 用 増 減 額	現 定 額	支 出 額	不 用 額	備 考	入 濟 額		
							入 濟 額	入 濟 額 差	
科 目	原 定 額	流 用 増 減 額	現 定 額	支 出 額	不 用 額	備 考	入 濟 額	入 濟 額 差	
第一款 金澤醫學專門學校十全會	六四、五三		六四、五三	六八、九三	七、五〇		六四、五三	〇	
第一項 特別會員寄付金	一一、六〇		一一、六九				一一、六九	〇、〇九	
第二項 職員寄付金	一一、六〇		一一、六九				一一、六九	〇、〇九	
第三項 通常會員會費	五九、五〇		五九、五〇				五九、五〇	〇	
第四項 第一目 醫學學生會費	五〇、〇〇		五〇、〇〇				五〇、〇〇	〇	
第五項 第二目 醫學學生會費	四、五〇		四、五〇				四、五〇	〇	
第六項 第三項 利益金	三、四三		三、四三				三、四三	〇	
第七項 第一目 基金 利子	三、四三		三、四三				三、四三	〇	
合 計	六四、五三	七九、七六	一四四、二九	六八、九三	七、五〇		一四四、二九	七、五〇	
明治三十五年度金澤醫學專門學校十全會支出決算表									
科 目	原 定 額	流 用 増 減 額	現 定 額	支 出 額	不 用 額	備 考			
第一款 金澤醫學專門學校十全會	六四、五三		六四、五三	六八、九三	七、五〇				
第一項 講 話 部	二五、〇〇		二五、〇〇	三三、六一	一、三九				
第二項 第一目 大會 費	一五、〇〇		一五、〇〇	三三、六一					
第三項 第二目 常會及語學部 費	二、〇〇		二、〇〇	九〇					
第四項 第三目 臨時 會 費	二、〇〇		二、〇〇	九〇					
第五項 第四目 講話材料費	一、〇〇		一、〇〇	九〇					

第五目 語學部大會費	五,000	△三六二	一三九	一,三九九
第二項 雜誌部	三六,八〇〇	—	三六,八〇〇	三三,九六一
第一目 雜誌費	三五〇,〇〇〇	△三三六〇	三四六,四〇〇	三〇一,八七〇
第二目 通信費	九,〇〇〇	六〇四	一五,〇四〇	四七,九九
第三目 消耗品費	七,〇〇〇	△一,〇〇〇	六,〇〇〇	四六〇
第四目 新聞費	二,八〇〇	△一六〇	一〇,一〇〇	一,三三〇
第五目 製本費	三,〇〇〇	—	三,〇〇〇	七九
第六目 雜費	一,〇〇〇	—	一,〇〇〇	〇
第三項 遊技部	一五,六〇〇	六八二	一四,一四〇	九五
第一目 秋季運動會費	八,一〇〇	二八九	八六,〇〇〇	八六,〇五三
第二目 春季運動會費	二〇,〇〇〇	三九八	三,九八	三三,九八
第三目 ロンテニス費	二五,五〇〇	七,〇〇〇	三,五〇〇	三,五四五
第四目 フットボール費	七,〇〇〇	△七,〇〇〇	—	九五
第四項 劍道部	二八,〇〇〇	—	二八,〇〇〇	二八,〇〇〇
第一目 寒稽古獎勵費	二,〇〇〇	—	四九五	二,四九五
第二目 春秋大會費	一五,〇〇〇	五〇五	一五,五〇五	一五,五〇五
第三目 雜費	一,〇〇〇	△一,〇〇〇	—	—
第五項 柔道部	二六,〇〇〇	—	二六,〇〇〇	二六,〇〇〇
第一目 寒稽古獎勵費	二,〇〇〇	—	一,八六	三,一八六
第二目 春秋大會費	一五,〇〇〇	△一八六	一四,八四	一四,八四
第三目 雜費	一,〇〇〇	—	—	—
第六項 弓術部	三六,八〇〇	—	三六,八〇〇	三九,〇八九

第一目 大會費	一五,〇〇〇	五,三三〇	二〇,三三〇	二〇,三三〇
第二目 備品費	一八,五〇〇	△二,九七五	一五,五二五	一五,五二五
第三目 雜費	三,三〇〇	△六	三,二九四	三,二九四
第七項 會務費	二〇,〇〇〇	—	二〇,〇〇〇	一六,〇〇〇
第一目 備品費	二,〇〇〇	六六〇	八,六〇〇	八,六〇〇
第二目 印刷費	二,〇〇〇	△一,〇〇〇	一,〇〇〇	—
第二目 消耗品費	八,〇〇〇	△四,六三〇	三,三六〇	—
第四目 雜費	五,〇〇〇	△一,〇〇〇	四,〇〇〇	—
第五目 有功賞費	三,〇〇〇	—	三,〇〇〇	—
第八項 豫備費	三九,三三三	△九,一七〇	三〇,一六三	八,六七六
第一目 豫備費	三九,三三三	△九,一七〇	三〇,一六三	八,六七六
經常部合計	六九四,五三三	—	六九四,五三三	六八九,九三三
				七五,五七〇

三十六年十一月三十日

會長 高安 理事 佐々木 書記 永山

三十五年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費ハ
 收支今般別表ノ通逕決算ノ實收入金百八拾圓八拾四錢五
 厘實費支出金百拾壹圓參拾六錢差引金六拾九圓四拾八錢
 五厘翌年度ノ繰越スハキ金額ナリ之ニ前年度繰越金七拾
 六圓八拾參錢九厘ヲ加ヘ現在繰越金百四拾六圓參拾貳錢

四厘ナリ
右報告候也

明治三十五年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費收入決算費

科 目	豫定額	濟收額入	豫定額ニ比シ收		備 考
			入濟額ノ差	増 減	
第一款 金澤醫學專門學校十全會	三三、〇六六	一八、〇四五	—	—	二四、三三三
第一項 校外特別會員會費	三〇、〇〇〇	一七、〇〇〇	—	—	一三、〇〇〇
第一目 本年度卒業生	一七、〇〇〇	一七、〇〇〇	—	—	未納者アリ
第二目 本年度以前卒業生	一四、〇〇〇	—	—	—	シニ依ル
第二項 前年度未納者	一三、〇〇〇	—	—	—	シニ依ル
第四目 新入會費	—	一、〇〇〇	—	—	全入會者アリ
第二項 利益金	五、〇六六	八、八四五	—	—	新設ス
第一目 預金 利子	五、〇六六	八、八四五	—	—	目ヲ新設ス
合 計	三三、〇六六	一八、〇四五	—	—	一四、三三三

明治三十五年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費支出決算表

科 目	豫定額	濟支額出	不用額
第一款 金澤醫學專門學校十全會	八〇〇、三〇〇	—	—
第一項 特別會員寄付金	一四、〇〇〇	—	—
第一目 職員寄付金	一四、〇〇〇	—	—
第二項 通常會員會費	一四、〇〇〇	—	—
第一目 醫學學生會費	一四、〇〇〇	—	—
第二目 藥學生會費	—	—	—
第三項 利益金	—	—	—
第一目 資金 利子	—	—	—
合 計	八〇〇、三〇〇	—	—

三十六年度十全會收支豫定額調

科 目	三十七年度	三十八年度	三十九年度	四十年度
第一款 金澤醫學專門學校十全會	一八〇、八八五	一八〇、八八五	二二、三三〇	六八、八八五
第一項 校外特別會員	一八〇、八八五	一八〇、八八五	二二、三三〇	六八、八八五
第一目 雜誌費	一五、三三五	一四、三三〇	一四、三三〇	三、三三五
第二目 通信費	三、三三〇	三、三三〇	三、三三〇	—
第三目 雜費	五、〇〇〇	五、〇〇〇	一、二〇〇	—

(會報)

第一款 金澤醫學專門學校十全會		七六、二三
第一項 講話部		二七、九〇〇
第一目 大會費		三三、九〇〇
第二目 常會及語學部費		二、〇〇〇
第三目 臨時會費		五〇〇
第四目 講話材料費		一、〇〇〇
第五目 語學部大會費		五〇〇
第二項 雜誌部		四四、〇七〇
第一目 雜誌費		三六、五〇〇
第二目 通信費		一六、六四〇
第三目 消耗品費		七、〇〇〇
第四目 新聞費		一一、八八〇
第五目 製本費		三、〇〇〇
第六目 雜費		一、〇〇〇
第三項 技部		一四、六三三
第一目 秋季運動會費		一〇〇、〇〇〇
第二目 春季運動會費		三〇、〇〇〇
第三目 ロンテニス費		四三、〇〇〇
第四目 フリドボール費		六三三
第五目 端艇基金		一、〇〇〇
第四項 道部		三〇、〇〇〇
第一目 寒稽古獎勵費		二、〇〇〇

第二目 春秋大會費	一五、〇〇〇
第三目 雜費	三、〇〇〇
第五項 柔道部	二八、〇〇〇
第一目 寒稽古獎勵費	二二、〇〇〇
第二目 春秋大會費	一五、〇〇〇
第三目 雜費	一、〇〇〇
第六項 弓術部	四六、〇〇〇
第一目 大會費	一五、〇〇〇
第二目 備品費	二六、〇〇〇
第三目 雜費	五、〇〇〇
第七項 會務費	二〇、〇〇〇
第一目 備品費	二、〇〇〇
第二目 印刷費	二、〇〇〇
第三目 消耗品費	八、〇〇〇
第四目 雜費	五、〇〇〇
第五目 有功賞費	三、〇〇〇
第八項 豫備費	五五、六三〇
第一目 豫備費	五五、六三〇
經常部合計	七六、二三三
臨時部	一四、〇七七

第一目 春秋大會費	一五、〇〇〇
第二目 雜費	三、〇〇〇
第五項 柔道部	二八、〇〇〇
第一目 寒稽古獎勵費	二二、〇〇〇
第二目 春秋大會費	一五、〇〇〇
第三目 雜費	一、〇〇〇
第六項 弓術部	四六、〇〇〇
第一目 大會費	一五、〇〇〇
第二目 備品費	二六、〇〇〇
第三目 雜費	五、〇〇〇
第七項 會務費	二〇、〇〇〇
第一目 備品費	二、〇〇〇
第二目 印刷費	二、〇〇〇
第三目 消耗品費	八、〇〇〇
第四目 雜費	五、〇〇〇
第五目 有功賞費	三、〇〇〇
第八項 豫備費	五五、六三〇
第一目 豫備費	五五、六三〇
經常部合計	七六、二三三
臨時部	一四、〇七七

第一項雜誌費	一四、〇七
第二項書棚購求費	一四、〇七
臨時部合計	一四、〇七
合計	八〇、三三〇

科目	金額	備考
第一款 金澤醫學專門學校十全會	四四、七二〇	
第一項 校外特別會員會費	四一五、〇〇〇	
第一目 本年度卒業生	一五、〇〇〇	一人二付 金參圓 五十三人分
第二目 本年度以前卒業生	一〇五、〇〇〇	全 金壹圓 百〇五人分
第三目 前年度未納者	一五、〇〇〇	全 金參圓 二十六人分
第二項 利益金	九、七〇〇	
第一目 預金利子	九、七〇〇	繰越金百六拾貳圓一ヶ年利子百圓二付 年六歩
合計	四四、七二〇	

會 告

○寄贈及交換書目

(十一月卅日迄領收ノ分)

- 大日本耳鼻喉科會々報 九ノ五ノ六、 同 會
- 靜岡縣醫學會々報 七、 同 會
- 東京醫事雜誌 一三七、八、九、三〇、二、三、四、 同 會
- 藥石新報 四七、八、九、八〇、二、二、 同 社
- 北海醫報 三ノ五、 北辰病院研究會
- 藝備醫事 八ノ八ノ四、五、 同 發行所
- 產婆學雜誌 四六、七、 日本產婆學協會
- 日本醫事週報 四五〇、一、二、三、四、五、六、七、八、 同 社
- 醫海時報 四六、七、八、九、九〇、一、二、三、四、 同 社
- 獨逸語學雜誌 六ノ一、二、 同 社
- 中外醫事新報 五三、五、六、七、八、 同 社
- 成醫會日報 二五、六〇、 同 會
- 神經學雜誌 二ノ四、 日本神經學會

(會 告)

產科婦人科學雜誌 五ノ二〇、二一、

同 會

醫學中央雜誌 八、九、

同 社

醫事新聞 六七八、八九五〇、

同 社

會報 三、

同 社

東京教育時報 三七、

東京市教育會

台灣醫學會雜誌 一四、五、

同 會

助産之槩 八九、九〇、

緒方助産婦學會

日本眼科學會雜誌 一七ノ二〇、

同 會

皮膚科及泌尿器科雜誌 三ノ五、

日本皮膚科學會

大日本會私立衛生會雜誌 二四、五、六、

同 會

千葉醫學會雜誌 五、

同 會

齒學研鑽 四ノ三、

富岡齒科治療所

校友會雜誌 三、

東京開中學校會

順天堂醫事研究會雜誌 三七〇、

同 會

植物學雜誌 一七ノ一九、二〇〇、

東京植物學會

研瑤會雜誌 五、六、

同 會

國家醫學會雜誌 一九、九、

同 會

中央醫學會雜誌 五、五、

同 會

岡山醫學會雜誌 一六四、五、

同 會

衛生談話 三、五、

通俗衛生茶話會

東京醫學會雜誌 一七ノ一九、二〇、二一、

同 會

治療新報 二〇、

同 社

學校衛生 六、

學校衛生研究會

校友會雜誌 三、

同 會

校友雜誌 三、

京都府立醫學專門學校同會

齒科醫學會月報 一、

同 社

學士會日報 一八八、

同 會

醫學會雜誌 一三六、

陸軍々醫學會

藥學雜誌 二六〇、一、

日本藥學會

東北醫學會々報 三〇、

同 會

廣島衛生醫事月報 五、九、

同 社

日本消化機病學會雜誌 二ノ三、三、

同 會

校友會雜誌 二六、

千葉醫學專門學校同會

北海醫學會々報 二、七、

同 會

矣

公衆醫事 七ノ六、

日本助産婦新報 七、

醫談 八七、

好生館醫事研究會雜誌

新本重次郎著 上 中 三冊

訂眼科學 下 原田八十八補譯

改訂愛氏內科全書 自卷一 至卷九 九冊

鳴氏內科全書 卷一 二冊

新撰電氣療法 一冊

學校衛生學 一冊
石黒伯纂著
臨用顯微鏡及化學的檢査法 一冊

人體解剖學 第二卷 壹冊

同 會

同 發行所

同 發行所

同 會

故米澤啓紀念書籍

同

同

同

同

同 雜誌部

石川直喜君

○會費領収

(明治三十六年
十二月十九日迄)

金參圓 (自三十四年度三ヶ年分)

金壹圓 (三十五年度一ヶ年分)

金參圓 (自三十六年度三ヶ年分)

金參圓 (自三十六年度三ヶ年分)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

金參圓 (自三十四年度三ヶ年分)

金參圓 (自三十六年度三ヶ年分)

金參圓 (同)

金參圓 (同)

石田 五佐君

河崎 有作君

清水 末吉君

小林 孝一君

前田 豊作君

館 昇 榮君

齋藤 賢德君

花岡 佐太郎君

春田 久太郎君

中田 徳次郎君

林 京次郎君

政山 龍雄君

小幡 學雄君

大塚 正一君

須田 嘉三郎君

吉井 康次郎君

羽根田 信次君

金參圓 (同)

上)

小島 顯治君

金參圓 (同)

上)

中村 辰八君

金壹圓 (三十六年度一ケ年分)

高松 岩吉君

金壹圓 (全)

上)

徳木 千秋君

* * * * *

次號原稿ノ切
本月三十一日
續々投稿ヲ乞

ENDE
GUT,
ALLES
GUT!

* * * * *

吾十全會會員
諸君の芽出度
新年を迎られ
んことを祈る

年暮れぬ

笠きて

草鞋はきながら

